
彼と彼女の曖昧ミーマイン

伊舞 莓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼と彼女の曖昧ミーマイン

【著者名】

伊舞 莓

N4339F

【あらすじ】

彼はとても良くモテる。バレンタインは紙袋を3つ、4つ持参しないと行けないくらい、良くモテる。そんな彼と私の幼馴染みと云う曖昧な日々。

曖昧な一日田（前書き）

完結予定はありません。実はオチしか決まってません。
(作者にとっても)色々と曖昧な、彼と彼女の曖昧な日々。

「ああああ……。持久走とか本気で面倒くさい！」

「今のお前の顔を見続けるよりかは、精神的に大分マシだ」

「うつさいーー」と机の下から脛を蹴ると「うぐうう」と押し殺した様な悲鳴が漏れた。ざまあみやがれ。自分の顔が多少良いからつて自慢しやがつて。こんな顔でもこちとら地道に頑張つてんだ（ジユーラーしようとして瞼を挟んで悶絶で諦めたなんて、そんな事棚上げだ）！

「てか、女子の方が楽だろーが。俺達と比べてみやがれ」

「あんた達は男でしょーが。体力有り余つてんだから、少しは健康的に使つたらいいでしょ」

「3キロだぞ？ 健康的すぎて某体操のお兄さんも真っ青だつつの。大体2限だつつーのに腹減るんだよ。4限は拷問」

「あーそれは分かる。下手したら3限で鳴るもんねえ。ねえねえ、それよりも英語の予習」やつた？ 日本語訳がイミフなんだけど

「あー？ 見せてやつても良いけど、今度マック奢れよ」

「この守銭奴め。ポテトのMならおひつてやるつ」

「アホか。セツトに決まつてんだる」

生意気な事を云いながら鞄をあさりだした男に、ちつと舌打ちする。

神様つて不公平だ。顔も頭も良い人間をこの世に生み出すなんて。その上周りには『優しくて思いやり溢れて、ノリも良い美少年』で通つてゐるから、周りから見ればパーフェクトだ。この前のバレンタインなんて、黄色い声がうるさいの何の（此奴はこの席から動

かずにはずつとチョコ食つてた。だから必然的教室は女子の山で私は
席に着けなかつた)。

こんな人間が幼馴染みの腐れ縁つてどーよ?

私は唯一般市民で、帰宅部の特殊な事つて云つたら此奴がお向
かいさんな事ぐらいなのに。

こんなのが幼馴染みだつたら、

惚れないわけ、ないじゃないか。

曖昧な一日目（後書き）

曖昧な私と私の物みたいな意味と、ノリとリズムで決めたタイトル。作者にネーミングセンスなんて皆無です。欠片さえ見た事ありません。

このタイトル、何処かで見た事があつても気にしないで下さい。作者が15秒くらいで決めたので。

曖昧な日常（前書き）

曖昧な日常は曖昧な関係のままだ、この距離が近いのかやつこやないのかすら解らない。

「お前さあ、本当に現代の女子高生か?」

「悪かつたね。現代人じゃなくて」

人の金で買ったポテトを摘まみながら真顔で尋ねてきた日の前の美形に、軽い殺意が芽生えたのは必然的な流れだと思つ。

思いつきり、あのお綺麗な顔をぶん殴つてやりたい。あの無駄に整つた鼻をぺしゃんこにしてやりたい。頭の中では既にリングの中でグローブを付けている自分が居た。

私は机の下で拳を固く握つて耐えた。物凄く耐えた。流石に女としてどうかと思つたのだ。

その代わりにこちとらお前と違つて他人に貢がせる様な顔してねえんだよ。と心の中で吐き捨てる。勿論それだけで収まるはずがないのでオレンジジュースをズゴーンと云わせながら啜つた。すると、

目の前で無駄に綺麗な顔が嘲りの表情を浮かべやがつた。

お前の目の前のコーヒーとポテトを誰が奢つてやつて居ると思つて居るんだろうか。

おこづかい制の人間としては、外食＆オゴリといつダブルコンビネーションについては、ひどく御遠慮しておきたいところだというのに。だがしかし、英語の借りがある（あの日は本当に当たつてしまつた）。なので『仕方なく』奴と一緒にマックまで来てやつたのだ。

「いや、俺は女子高生の辺りに重点を置いて言つたつもりだったんだけどな」

「んー…その辺に關しては否定しない。普通の女子高生は彼氏でも

ない男とマックで一時間も喋らないでしょ。ましてや2人つきりとか、ありえないね」

それもそうだ。と呟いて、残つてたコーヒーを飲み干した無礼者はちやつちやと片付けだした。その様を見ながら私はバレンのよう

に溜め息を吐いてトレイを持ち上げた。

バイトでもして、お金稼ごうか。そうしたら、また2人つきりになれるだろうか。

高校生にして貢いでるってビーカー。と思いつつも、パリを思いつきりまるめて「ミニ箱に入れた。

曖昧な2回目（後書き）

まだ名前が決まっていない曖昧さ。
こんな感じのまま何処まで行けるのかやってみよっと思っています。

豊かな日本（福井県）

結論、頑張りました。

結局、私はコンビニでバイトを始めた。

笑いたければ笑え。私は貢ぐ。ああ高らかに宣言してやひつとも（誰にだなんて）ツツ「ミミは、ミミ箱ポイだ！」

だいぶ板に付いてきたレジ打ちを着々と進める。飽きっぽい私にしては、2ヶ月もよく持つたもんだ。

店長さんや先輩もいい人で、結構楽しい。貢ぐ貢がないはおいといて、それなりにお給料も貰っている。若い女の子が憧れる様なロマンスなんて、欠片もないけれど（店長は40代の普通のオジサンだし、先輩は若い女子大生とオバサマ。別のバイト君はシフトが違うから会つた事がない）、それについて何かを云う程、私は贅沢者じやないから気にならない。

現実ではロマンスビュージャなくて、貢いでいるからなんだけどね！

ピークも過ぎてお姉さんが居なくなつてから、レジから離れて商品の補充に行つた。

一応A型だから、気になつてしまつ。特に、立ち読みされた後の雑誌が。

立ち読みは別に良い。でも、もう少し綺麗にして行けよなあ。

などとグチグチ考えながら直していると、この時間帯にしては珍しく自動ドアの開く音がして、条件反射で『いらっしゃいませ』と挨拶する。何気なくドアの方を見て、その次の瞬間バツと顔を背け、即座にお菓子コーナー（死角）に逃げた。

だつてあれだ。 アイツは今日グラマーなセレブ大学生と「トー
中のハズだ（顔とカラダと金回りは良いんだけどなあ。 性格がな
あ……。 ウザイ。 とかぼやいてたのはつい先週だ）。

「驚いた。
本当に店員やつてるんだな。お前」

「お客様あ、何かご用がおありでしたらあ、あたしい、アルバイトなんでえ、カウンターの方へ お願いしますう」

「うう、自分でやつといてなんだけど、氣色悪い。私はなるたけ高い声を出してクラスのギャルっぽい女の子の口調を思い出していた。『超無理なんんですけど！ マジキモイ！』が口癖のクラス1のギャルだ。そんな私の必死の隠蔽工作をアイツはハツと鼻で笑うと後頭部にいきなりデコピンをかましてきた。

「語尾伸ばすなよキモチワリイ。 つーか、アルバイトだろうが何だろうが職務放棄かよ。 そんなんで給料貰つて良いのか。 僕に寄越せ」「

「うるさいな（云われんでもアンタ用だ！）。」おちどら必死で
お仕事中なんだから邪魔しないでよー！」

「とにかく必死なんだよ。」
「うう、上には貢廟しにあでやかでんだアニ
が。 嘘くな」

『』の憎いあんちくしょうは、『ヤーヤ笑いながら私の店員服を眺めている。畜生、背高いから見下ろされてるだけじゃなくて『見下されてる』様な気がして腹立つんだよなあ！

「つーかレイカさん、ビーしたのさ」

「あー、めんどいから別れた」

「……それで泣かれてウザかつたから、取り敢えず自然消滅狙つてるつて、確かアンタ一週間前に云つてたよね。あら？私の記憶違い？それとも幻聴？」

「いや、今回も泣いた。だから振り切つて逃げてきた」

「……（女の敵だなコイツは！）呆れた。……で、何をお求めでしょーか、お客様？」

「腹減つたから、なんか食いに行こーぜ。昼まだだろ。奢つてやるよ」

一瞬の空白。脳みそが上手くその言葉を租借できなくて、多分3秒ぐらい、思考が停止した。

今までコイツは私に奢つてやるといったことなんかあつたるーか。いやない。一回もない。え、なにこれ、何のフラグが立つたんだコレ。人生のロスタイムとかか。

「…………は？ どしたの、急に。え、熱もあるの？」

「失礼なヤツだな。その制服の似あわなさ加減に免じて、奢つてやろうと思つただけだよ」

確かにオレンジのエプロンは、明るすぎて私には似合わない（分かつても人に云われると腹が立つのは、何故なんだろーー）。

もし、私が此処で断つたら、コイツはどうせ、テロでも動かず営業妨害をするだろ。そういう男だ（人の不幸を楽しみやがつて！）。

ながーくふかーい溜息を吐いて決断する。しょうがない（そう、しょうがないのだ）。先輩に云つて融通して貰おう。どうせもう残り30分だし、ピークは過ぎて居るんだし、店長も奥にいるはずだし（確か事務作業中）いいんじやないかな。いいだろ。良

「ことは悪いの」「、元のところなんとも云い訳がまじへ思えるのだろうか。

宣言しておくれ、これは事実であつて云い訳ではないんだよ！
などと思こながらスタッフフルームへ。 けつして急ぎ足になんか
なつたりしなによつて、ゆっくりと歩を進める。

「ちょっと、『与めるなそこ』… 珍獣じゃないんだから。 自分でも
似合わないの分かつてんだよこのやうつ」

「つてえな、殴んなよ。 もう取つたし。 待つとくからさうあと
行つてこい」

「死ね女の敵！ 今までの分さんわん奢りやつやるから、覚悟して
けキャラ男つ」

へいへいと手を振るヤツを横田に、カウンターの先輩に事情を
説明して抜けをせて貰つ。

「なに、彼氏なの？ カツコイー。 あんたも若いわねー」
「違いますよ、」

苦笑いをするしかない。私はどうせ、アイツの彼女には、なれないのだから。

「唯の、幼馴染みの腐れ縁です」

願わくば、いつかこの立場を変えられるような勇気が、身に付き
ます様に。

豊かな4日目（前編）

初めて、貢がれてみました。

「なんでマックなの。せめてモスでしょう」

「つむせご。文句云つな」

ベシシと頭を叩かれて思わずよろける。「ちょ、私のアイスティーが！ 暴力反対！」と眉を顰めて抗議すると、アイツはお綺麗な顔を歪ませ余裕綽々で片眉を持ち上げ云つた。

「ハ、元が元なのにそんな顔してると、更にブツサイクだな」

ほつほおーーう？

ちよつとした（此処重要）不可抗力があつて、席に座る前にヤツの足を軽く（此処重要、テストに出ます）踏んでしまつた。

「つひつてしまえ……！ お前、自分の、体重、わかつてんの、か？！」

「あ～ら、『つめんあそばせ～』ちよつと足がすべちゃつて。いややつぱり床が綺麗だと駄目ね～」

「お、まえは！ だからって脛を蹴るな！ 痛い！」

「ちよつとした不可抗力が」

「何処がだつ。明らかに作為的かつ確信犯的だろ？が！」

恨みがましい目つきで睨んでくるイケメンに、店内の視線は集まりに集まっている。オイオイ、なんで溜息吐いただけで盛り上がるんですかオネイサマガタ？ コイツはそんなキャラじやないですよー。ちよつと絞つたら即捨てるようなクズ男ですよー。と心

の中では「ミミの嵐だ（そんな奴に惚れている1人のくせに）。」
だなんて「ミミは、現在担当者が不在の為お答えできません」とい
う事にしておいた）。

思えばコイツに惚れて（いるのを自覚して）『彼女』 という
ポジションに憧れ続け、早5年。 色んな女に（両手両足の数だけ
では足りない程の女達に） 嫉妬し続けて早5年。

ある時は同級生に。 ある時は後輩に。 中学の頃には社会人に。
一番最近で『云々』（見た事無いけど）。 その前
は後輩である中学生に。 とガーリーハーモニコンには事欠かない。

だけど、『コイツは『マイルール』とやらを設けているらしく』付
き合つのは『3ヶ月以内』だけらしい。 本命できたら、どう、するん
だろ？（チクリ、と胸が痛んだ。 こんな事、考えなければいい
んだ。 消去！）。

『コイツは付き合つて『彼女の事を、かなり赤裸々に（かつ淡々
と）語つてきやがるので、私はシたことなんかないのに、かなり
の耳年増になつてしまつた（そのせいでもみんなから誤解されるんだ
よー。 ソウイウ話題フツて来んな馬鹿！）』。 性格が悪いとか、
センスが悪いとかだけなら良い。 それ以外にも大分語るのだ。
この男は！（ああもう思い出しだけでも恥ずかしい！）

私がそれでどれだけ傷付いているかなんて、『コイツは全く知らな
いだろ？』

傷口からは血が溢れて、カサブタもできないくらいに、抉られて
いるのに。

ああ、それよりも不可解なのは、どうして私がコイツの暗部を
知っているというのに、こんなにベタ惚れなのかという事だ！

「人間って、不可解なイキモノだよなあ」

「はあ？ いきなりなんだよ」

「唯單にちょっと人生についての考察をしていただけですが何か？」

「ふうん。お前がそんな事を考えられるだなんて、驚きだな。

精々体重の事とか、あの似合わないコンビニの制服ぐらいなもんかと思つてたんだけどな」

「画像見せるな。つーか消せコノヤロウ。イヤイヤ、私だつて気にしてるよ。例えはお菓子の量減らしたりとかさー。」

「もう手遅れだろ」

「ちょっとと待てまだ平均維持してるから大丈夫だからってなんでそこで田え反らす訛こつち向けコルアだからって哀れみの視線向けないでくれません腹立つんだよこのタラシが！」

「良く一息で云いきつたなあ。女の肺活量とは思えな、うわっ」

「人生を哲学してた女にしては、気品も何も感じない行動だな。意地汚い」

「うるさい。気品のない哲学者もいるかも知れないでしょ？が」

「かもな。ま、個人の自由だけど」

「ちょっとと待てなんで私にはその個人の自由が適応されないのよ。

私は立派な日本人ですっ！」

「はいはい、分かった分かった」

腹の立つ返答を返しながら、ヤツはテリヤキバーガーを食している。私もチーズバーガーにかぶりつく。ああ、体重が増える。でもやめない。だっておいしいと幸せだから！

もしゃもしゃと無言でハンバーガーを食しながら、コイツが彼氏だったら、どうなんだろう。ヒアリエナ妄想をしてみた。

多分、きっと。私は逃げるんだろうなあ。似合わないから、釣り合わないから、つて。でもそれでも離れられなくて、泣くんだろ？（な（ヤバイ、なんかリアルすぎる））。

抉られた場所が、ジクジクジクジク。膿んで、ボロボロになつて、ドクドクドク血を流し続けて。でもそれを隠して。絶対にバレないように、包帯を巻くんだろうな。

グルグルグルグル。何重も。血なんか見えないよつ。グルグルグル。

「てかさー、もうちよつと乙女を気遣つて、カロリー抑えめなトコに連れてつてくれてもいいじゃん？ マックじゃムードもへつたくれもないし」

「なんで俺にそんなモノを求めるんだよ。面倒臭い。大体お前にはマックがお似合いだよ。つづーかマックしか考えられない。It is cheap！」

「ひど！ そこは悪かったとか云つて流してよー！ てかなんでそんなに発音よく区切るの指さすな！」

「ハハハ、悪い、俺つて正直者だから、本当の事しか云え無くつてや」

「オイオイオイこのエセプレイボーイが何を云うか！ 爽やかに笑つても無理だよ本性だだ漏れだよ。第一、ついこの間までレイカさんには愛を囁きつつ、裏でウザイウザイほざいてたクセにさー。」

「女には別」

「うわつ最低だこの男。つーか私も女だよ乙女だよ」

「冗談は休み休み云え。乙女はローキックとかしないんだよ。

それにな、考えてみる。『好きだ』と云つたら相手は喜ぶし、

俺にも金が入る。一方素直に本心を出して、『お前なんて唯の力ネヅルとしか見ていない』なんて云つてみる。向こうも悲しむ上に、俺には金が入つてこない。此程意味のない事もそうそつ無いだろ？ これはな、ギブ アンド テイクなんだよ』

ズキズキズキズキ、ジクジクジクジク。

痛い痛いと、傷口が痛みを訴える。骨にまで達して、貫通してしまつたんじやないかつて云うぐらい、痛んで。

『お前なんて唯の力ネヅルとしか見ていない』

私も、なのかな。私も、唯の力ネヅルなのかな。彼女なんてポジションには、絶対たどり着けないのかな？（ああ、そんな事、もつと昔から知っていたのに）傍にも、居られないのかな？（あの時にちゃんと、知ったはず、なのに）

ああ、私は欲張りだから、なあ（諦めなきや、いけない、のに）。痛い痛い傷口が痛い。ああ、包帯を巻いて、隠さなきや。

だつて、知られたらきつと、そこで終わりだから。涙なんか見せちゃダメだ。ささやかな幸せだつて、得られなくなるんだ。もう一度と、一緒に居られなくなつて、しまつんだ。

「本当に、最低な、男だ、な」

隠して逃げなきや。希望はないんだから。

「まあ、カネヅルだけが目的じゃないけど
の意味なんて、私は知らない。」
と、彼が云つた言葉

駿馬なら田畠（龍樹也）

長いので、ぶつた切つてみました。

で、何がどうしてこうなったんだっけ？

今、私を覆つている大きくて熱いのって、ナニ？

「なんであんたと帰るのが恒例になつてるんだましょ……」

「帰り道が同じ方向で、同じクラスだから被つてるだけだろ」

「偶然の一致か。あつちゃんと云つたらどうなるかな」

「『偶然！ ああそれは何と神秘的で美しく、且つ素晴らしい事でしょう！ さあ私と一緒に心靈と精神と愛と幻の世界を指してお祈りを致しましょう！』は一れる——やーあ』

「わあーさつすがーあ。よつと解つてるーう」

小中高と幼馴染みの、所謂『不思議っ子』の友達の事を持ち出してみる。長い茶髪を振り乱して、良く分からない愛の神様に忠誠を捧げる彼女はこの辺りの名物だ。遠目から見ている分にはとても面白いが、絡まれると厄介な人だ。

過去の諸々を思い出して思わず遠い田になつてしまつた私に、あいつも溜息を吐きながら応じる。

「伊達に2年も同じ委員会にいねえよ。面白いから良いけども、毎回俺に責任が降りかかるのは頂けないな」

少しづつ暖かくなつていてるけれど、まだ5時だといつのに太陽は寒い地上からさつさと逃げてしまつていて。私にはもう特に行事はない（帰宅部だから引退なんてないし卒業式に特に感慨が在る訳ではない）。後は春を、新学期を待つばかり。と云つた時期のハズだ。

何もない。特に、別に何か特別な事があつた日ではないはず、だ。

「うー寒い。もう3月なのになあ。マフラーと手袋が手放せない……」

「沖縄はもう温かかったりして、な

「羨ましいなあ。良いねえ、ビバ・南国」

「夏には北海道の事、ビバ・北国。るーるるるるる。つて云つてなかつたか?」

何も言い返せない（実際その通りだ）。良いじゃないか。思つた事なんだから。思いつきり顔を逸らして黙々と歩く。駅前には沢山の人々。有名私立小学校の制服を着たちみつちやいこ達がいっぱいに力レカノっぽく手を繋いでいる。時代が進んだと感心するべきなのか、ませすぎだと嘆くべきなのか。

「今時は小学生も凄いなあ。見なよあれ。キヤー可愛いじやんかあの男の子」

「……おまわりさーん、犯罪の匂いが隣から立ち込めてるんですー誘拐未遂ですー」

「誰がするか!」

この腹の立つイケメンの頭を叩きながら、駅の構内に入った。ふと、何の気なしに。そう、特に何もなかつた。意識なんかしてなかつた。頭が、視線が、券売機とは違う方向に向いた。

其処にいたのは、綺麗な人だつた。ライトブラウンの髪の毛はくるくるとウエーブを描いて、今流行の髪型。こぼれ落ちそうなくらい大きな瞳とふっくりと柔らかそうな唇。その頭には赤いチ

エック柄のベレー帽。そのベレー帽と同じ柄のコートに、白のタートルネックとジーパン。ロングブーツもベージュで、ファッショング雑誌から抜け出してきたモデルさんみたいな人だつた。流行の綺麗なメイクを完璧にしているその人は、何故かこっちを目を大きく見開いて凝視していた。そして、みるみるうちに長い睫に覆われた瞳に涙が溜まって。そしてキッと（何故か）此方を睨み付けてきた。かと思うと、ずんずんと此方に近づいてきた。

「おい、どうした？」

「え、いやなんか、あの女人の人

「ちょっと、いいかしら？」

私が足を止めてる事を不審に思つたアイツが訝しげに声をかけてきた。私はそれに返答しようと振り返つた時、後ろから、泣きそつな、そして強い怒りの籠もつた声が、した。ん？と云う顔で彼女の方を見たアイツが「あ」と声を上げて、眉根を寄せて（あの女人には負けるけど）困つた様に、その人の名を呼んだ。

「レイカ……」

「少し、話があるの。貴方達2人に、ね」

繆なう日田（後書き）

続をめか。

名前がないと予想以上にキツイです。ヒロインだけでも作ろうつかな。

眉根を寄せた綺麗なお姉様と、幼馴染みのイケメンに挟まれて、私は今、スタバにいます。

話に聴くレイカさんを実際に見るのは初めてだつたので思わずしげしげと観察してしまつ。長い睫に薔薇色の頬。モデルばりの美しさでさつきから店内の男性の視線はレイカさんに釘付けだ。

全く、本当に毎回毎回思うけど、どうやってこんな綺麗な人をゲットしたんだこのタラシは。と呆れながらもアイスティーを啜る。店内の視線は店員さん含め、このテーブル一直線だ。だつてこの図は明らかに、こつ、修羅場的だし。私が第3者だつたらやつぱり見ちゃうし。でもできれば見ないでほしい。

私の右側にいる馬鹿は、無言でコーヒーを飲んでいる。レイカさんは運ばれてきたレモンティーに手も付けずに元彼氏を睨み付けている。2人の間には嵐が渦巻いていて、何故か私は、その真ん中にいる。

「2人は、付き合つているのかしり？」

「え？ いいえ 「やうだよ。今日はなんでわざわざ呼び止めたりしたんだよ」

「……な……！ だつて、だつて私、私は貴方がつ」

「そんな事云われても、俺はもつ別にレイカを見る訳じやないか

「ら

ちょっと待て。私の返答まるで無視？ しかもコイツ速攻で嘘付いたよ。付き合つてないよ！ コイツ今フリーです！ フリーなんですよと周りのギャラリーに云いたい。寧ろ叫びたい。明らか

かに「あの美人からあのイケメンを奪つたのがアレ？！」的な顔だよ！無理だよ！と心中では大絶叫だ。

お願いだからもうほんとこっち見ないでクダサイ！

しかし無情にも私の願いは届かずandanと周りのテーブルの囁き声が大きくなり私の耳にもちらほらと飛び込んでくる。

「略奪愛か」「うそー！明らかあっちのがブスじやん」本当にうだよ。アリエナイ！てかコラ、そこで今ブスとか云つた奴表出ろや表エ！と内心で怒つたり冷や汗を流しまくつたりしていると、全ての元凶が口を開いた。

「大体、俺の愛を信じれないって云つたのは、そっちだろ」「そ、んな・・・」

ぐつとレイカさんが唇を噛み締めた。うーん、修羅場つて初めて見たけど、本当に居たたまれないな。と一応彼女役だというのに緊張感無く思つてしまつ。

ふと、どうして私はこんなに冷静でいられるのだろうかとぼんやりと考へる。

いつもの私なら此処での馬鹿の頭を思いつきり叩いて「謝りやがれこのやううー」女の子はなあ、総じてみんなデリケートなんだよー！そりやあもうプリン並に傷付いちやうんだよ！ブツチンに失敗するよりも惨たらしい事すんなー」とか云つてしまいそうなのに（なんでプリンなのかというと、バスとか云いやがつたテーブルにあつたからだ）。

なんでだろう、と思つてから、ハツと気が付いた。

今にも泣き出しそうなレイカを見て、多分私は今「さまあみろ」と思つてゐる。

それはあまりにも衝撃的で、あまりにも納得出来た。

なんて、汚いんだろう。 なんて薄汚い、浅ましい感情。

今彼が『彼女』と私に云つてしているのはこの場を切り抜けるための
仮初めての物で、決して私の物になつたりしない、の、に。

憧れて憧れ、焦がれて焦がれて、欲しくって欲しくって、でも、
決して私の所には来たりしない。

貴方の所へは来たんでしょう？それが例え遊びだったとしても。
数ヶ月でも、彼を自分のモノにしたんでしょう？ それが例え力
ネヅルだつたとしても。

汚くつて、浅ましくつて、本当に嫌になつた。 グルグルと渦巻
くのは、激しい嫌悪。 最低な自分への、とっても醜くて汚い感情。
目の前ではレイカさんが何か云つていて、アイツが淡々と答えて
て。 何て云つているのかなんてもう、頭に、耳に、心に、入つて
こない。

「ねえ、もう、もう、無理、なの……？ 私、私つ、貴方を忘れら
れないの……」

「何度も云つけど 「お前はいい加減黙れこのタラシ」

今自分が何て云つてゐるのか、もう解らない。 唯、此処から今す
ぐ逃げ出したかった。

「あなたは、人を利用すんな。 私はあなたと同じクラスで、変え
る方向が一緒の唯の幼馴染みであつてそれ以上でもそれ以下でもな
い！ 逃げる為だけに勝手に彼女にすんな馬鹿つ。 後、何度も云
うけど女の子は纖細で傷付きやすいんだからもうちゅうと言葉を選
べ！ 代金は全ての元凶であるあなたが払え。 以上！」

「うわ、相変わらずのマシンガントーいってえ！ だ、か、ら、蹴
んなつて云つてんだろうがつ」

「脚が滑った。 帰る！」

店内の視線を十二分に浴びて普通に出て行った（店員さんも良く聞いていたらしく、お金を払わず帰る私に何も云わなかつた）。

あの2人が又くつついたらどうしようとか、アイツ弁解するの大変だうなとか、これからどうしようとか、思う事は一杯で、頭の中「ゴチャゴチャしてて、なんだか、なんだか急に、

「やばい。 泣きたい」

雑踏の中で、心の中の醜さに引きずられた様に顔が歪んだ私に、誰が気付くところだらう。

そして続く。

意味な5日目 3 (前書き)

5日目終了です。

泣くんなり、やつぱつこいつ、古典的に、行きたいとは、思いませんか。

「う、みー……」

自分の家とは反対方向の列車に乗って。 2時間。 辺りはすっかり真っ暗だ。

いやね、やっぱり海のバカヤローって叫んでみたいと思つて。でも流石に時間も時間なので自粛。

暗い暗い色をした波が、まるで布のみたいに、ゆらゆら揺れている。 まだまだ寒いなと手をさすりながら、テトラポッドの上から空を見上げた。

「おかーさん、驚いてたなあ。 まあ、良いか」

電源を切つた携帯を見て苦笑する。 比較的にイイ口がやんだし、家族とはよつぽどの事でもない限り喧嘩もしない。「コレって『非行』だよね」と小さく口にする。 さつきから独り言が多いのは誰もいないからだ。 誰かいたらこんな恥ずかしい事しやしない。悶絶ものだ。

波の揺れる音、重たくのし掛かる雲、通り過ぎる風も、何だか世界の全てが冷たくて、鼻先がつんとした。 気付いたら、ポロポロと、田から海が出てきた。

「あ、ほりし……。 なに、やつてんだ、か……」

流れる海はテトラポッドと赤いマフラーに染みを作る。

私にどうしておなじみのかな。あの状況で彼女の振りしておかつて？笑つておけつて？そんな事、できないよ。苦しこよ。

あんなキタナイ事思つたのに、にっこり笑つて君の隣に居れる程、

私団太くないよ。苦しい、苦しいよ。

どうしてあんなこと思つたんだ。レイカさん傷ついてたのに。

同じく諦められなくて苦しんでたのに。

ああもう。苦しくて苦しくて身動きできやしない。

海に溺れて、もう、息も出来やしない。

「す、きだ……よ。ばー、か」

叫ぶ事はもう出来ないけど、呟く事なら、許されて欲しい。そ
う思つ事も、いけないのだろうか。

レイカさんの傷付いた顔が、ぐるぐると回つて、それに対しても
分がどう思つているのかも解らないぐらい頭の中がゴチャゴチャし
てる。でも、それでも良かつた。訳が解らないままでも良かつ
た。

だつて解つてる。

流れる海の意味なんか知つてしまつたら、まだ諦められない自分
に幻滅するつて、解つてる。

だから知らない。解らない。もう、これは本能なんだ。

泣きたいから泣くし、苦しいから叫ぶ。愛しくてしょうがないか
ら、だから愛する。

これはきっと、本能だから。だから泣いてるんだ。

「ひ……く、う……も、なん、だ、う……これ……ひつ。は、は……キヤラ、ヒ、ひつ違つ……」

しゃくじ上げる自分があんまりにも、女の子っぽくって笑いが漏れた。

「お前は泣いてんのか笑ってんのか、どっちなんだよ」「うえ、つく……は、あ？……うわ、なん、でつ」

いきなり話しかけられて、びっくりして振り向いた。そしてすぐに下を向いた。

な、なんで、居るかな？誰にも居場所なんか云つてないのに？！

「『神のお告げが、愛の壊れる音が聞こえます！』これはいけません。さあ貴方は何をぼさつとして居るんです？早く助けに行きなさいっ』って電話があつてさ。お前アイツが見てるの気付かなかつたのか？」

「ぜ、んぜん、気付か、なか、た」

「切符買つとこ見てたつて云うから相当近くにいたと思ひつい。まあだから此処が解つたんだけど、な」

すとんと、私の隣にあつたテトラポッドに腰を下ろした奴は私の事をじつと見ている。私はその視線に耐えられなくつて膝の間に顔を埋めた。

レイカさんはどうしたのとか、場所が解つたからつて別に来なくて良いじゃないかとか、また頭の中がゴチャゴチャして、暫く、出来る限り声を殺して泣いていた。

大分落ち着いてから、隣をちらりと見てみた。

遠くの海を見詰める横顔はやっぱり綺麗で、ああ好きだな。と

また海に溺れていいく感覚を自覚する。

それでも良い、と思ったのは何時？

もう、耐えられないと思ったのは、つこひさつき。

それでもまだまだ沈んでいく自分に、やつぱり幻滅するのは、今。

頭を膝に間に再度埋めてから、聞いてみた。数時間ぶりに喋る声は引きつっていて、喉がひりひりした。

「レイカさん、は」

「ん？ ああ、帰らせた。復縁もしない」

「さ、むい？」

「そらな。お前も寒いだろ」

「へ、いき。早、く帰った、ら？」

「お前は帰るのか？」

なんだか、非道く優しい云い方だなどぼうつと思つた。辛い時に優しくこんな甘い空氣醸し出されるなーんて、流石すぎでしょ。こんなだから女の子は引っかかるんだろうか。そんな事を思いながら小刻みに首を振つた。帰るんならお一人で。大体こんな顔で駄をうろついたり出来ない。

まあすぐに帰るだろうと思つていると、頭に何かが乗つかつた感触がした。それはゆっくりと私の頭の上を動く。まるで慰めている、みたいに。

「お前と一緒に帰るつて、おばさんと云つた手前、1人で帰れる訳ないだろうが」

それから、ゆっくりと、私に覆い被さる、大きな、熱いモノ。

「此処で、お前を待つよ。帰りたくなるまで、傍にいる」

「な、んで・・・・・・つ」

「お前が好きだ。それ以外に、理由なんてない」

それは非道く甘く、鼓膜を震わせた。

頭が真っ白になった。

記憶が飛んだ。

思わず馬鹿みたいに口が開きっぱなしになった。

そして私の思考は冒頭へ帰る。

で、何がどうしてこうなったんだっけ？

今、私を覆っている大きくて熱いモノって、ナニ？

あまり意識していなかつたのですが全部で7日になります。

意味ない図面（複数形）

6図面が無駄に長くなつたので幾つかに分けます。のでもう少しうまく続きます。

人生初の朝帰り。翌日はしっかりと熱を出した。

当たり前と云えば当たり前。何時間も海岸に居て、海風に当たり続けたのだから。

唯納得出来ない事に、奴は全く以て元気だった。確かに2時間ぐらい長く彼処にいたけど、それだけなのか。私がひ弱になっただけなのか。

思わず溜息が漏れる。泣き腫らした顔で帰つてきた私を見たお母さんは、黙つて私を部屋に上がらせてくれた。非道い顔だし熱も出でるし。と云う訳で、今日は学校をお休みする事にした。今日は金曜日だから明日と明後日ゆっくり休める。

「暇、だー……」

午前中はずつと寝てた。お昼には薬も飲んだし、宿題もこいつをりやつて終わらせた。読みかけだつた本も読破した。

正直、もうやる事何て、ない。皆無だ。

午前中に寝過ぎてもうそんなに眠くない。夕方5時。昨日と、同じ時間。

ぼんやりとした思考のまま私の頭の中はブカブカと空想の波間を漂つている。

レイカさんは、どうしてんだろ。アイツと今まで付き合つてきた女人の人達は、今、何をして、何を考えているんだろうか。

取り留めもなく色々な事を考えて、そして、結局思い出すのは昨日の海での事。

「好きだ」と云われて、私はずっと混乱していく、何も云えなかつた。

そんな私を、あいつは何時間も黙つて抱きしめてくれた。暖かかつた。

波の揺れる音、重たくのし掛かる雲、通り過ぎる風。

冷たい世界の全てを、彼が私の代わりに受けていた。

「日付が変わった」と彼が小さく呟いた。

それからまた少し経つてからまた彼が口を開いた。

「いつつも、最後には、お前の所に戻つてた」

「…………？」

「昔から、誰と付き合つても、誰と寝ても、誰の隣にいても、お前が頭の中に居た」

「…………」

ゆつくりと、噛み締める様に呟かれる言葉。私はそれを他人事の様に聞いていた。

私の頭の中は海月みたいにプカプカと波に攪われ浮き沈みを繰り返していく。

これつてホントに現実なのかな。ああ、遂に夢と現実の境目さえも分からなくなつたのか、と思つたけど、違つた。

今までこう云う展開なんてありえないつて思つてすぐ打ち消してたから、どう云つてアクションをとればいいのか解らなかつた。

「それが、なんかすっげえ悔しかつた。特に、最初。何にも意識しないで、唯云われたから取り敢えず付き合つてみようつて思つて、付き合つてた時。なんか良く分かんないけど、お前が頭の中から消えなかつた時。なんか、うーん……お前に、負けた気がし

た、つていうか

「…………

「すんごい餓鬼臭いけど、なんかすっげえ嫌んなつて腹が立つて。
だからソイツとさつさと別れて別の奴と付き合つた。でも、結果
は同じだつた。 それなのにお前は特に態度変えないし、それで、
もつとココが

見えないけれど、彼が心臓の辺りを叩いたんだろうと体に伝わる
振動で悟る。

「疼いて、痛くて。 そんな風な事思うのがなんか悔しくて、んでそ
んな良くなかんねー自分がもつと腹立たしかつた」

小さく、懺悔の様に話す彼の腕に、少し力が入つた。 水面に小さく映る影は重なつていて、それさえも境界線は曖昧。 普段なら鼓動が早まるのに、何だかとつても穏やかな気分で、されるがままになつていた。 互いの呼吸さえ曖昧に聞こえて、その事に更に安堵する。

「『それ』が何なのかは、中学に入つてからやつと氣付いた。
流石に多少は成長したから、な。 僕はお前に、妬いて欲しかつた。
焦がれて欲しかつた。 泣いて欲しかつた。 んで氣付いたら、
お前を振り向かせる為に、俺は色々な女と一緒に居た」

「……やる事変に大人なくせに、中身がガキンチヨすぎ、でしょ」
「云うなよ。 解つてんだから。……幻滅、したか」
「元から、してるよ。 色んな女の子、泣かせすぎ」
「……なあ、今、お前が泣いてるのは、なんでなんだ?」

彼の腕に、更に力が入つた。 苦しくなつたから、顔を上げた。
今度は彼が私の首筋に顔を埋めていた。 首筋つて云つてもマフ

「一越しだから、少し重たいと感じる程度だけだ。

でも、彼は確かにそこについて、私は確かに此処にいる。それだけは曖昧なんかじゃなくて、しっかりと、私達は世界の一部になつていた。

いや、きっと違う。きっと今此処に在る全部が、私達の世界なんだ。

だからこんなにも曖昧で、こんなにも優くて、こんなにも惹かれる。

「……汚い自分に嫌気が差した」

「なんだそれ」

「で、どーして、私な訳。それこそ、あんたら選り取り見取りだつたじゃない」

「さあ。……なんでだろ? だけどこいつの間にか、お前になつてた」

「……なんで、マトモに告白してこなかつたの」

「云つたろが。悔しかつたんだよ。単純に」

「…………じゃあ、なんで、今、更」

「家に帰つたらおばさんとお袋に説教されるし……。それに、お前が泣きわうな顔してるので、電話で云われた」

「……」

そつか、あの時あつちゃんが居たつて此処に来て直ぐ云つてたつけ。とほんやり思い出す。

それにもしても、私の周りの女性はバイタリティ溢れすぎていると思う。特にお母さんとおばさん。絶対この近所ネットワークフル活用だよあの人達……と変な方向に思考がずれていく私の頭に、また、彼の声が響く。

ゆつくりと、波間に差し込む月明かりみたいに静かに、海に沈む私に紡がれる言葉に、耳が、心が、意識の全てが、攫われていく。

「それで、いてもたつてもいられなくなつて、電車で2時間。だから俺は、お前が泣いてる理由を知りたいし、知る権利つて奴がある」

「云つた、よ」

「俺には良く分かんねーよ」

波の音と、お互いの呼吸だけ。世界から乖離された様な、不思議な感覚。

私と彼だけの曖昧な世界。遠くから車の音も聞こえて、その境界線さえ曖昧で、在るのかどうかも解らない。

日付が変わつた事も、彼との関係も、未来も、よく分からない。ああなんて、曖昧。

「教えてなんか、やるもんか」

そう呟いた後の記憶が、やつぱりすこく曖昧になつていて。

始発の時間に間に合ひつ様に駅まで行つて、私達は2人で、みんなの世界に帰つて行つた。

駄目な理由（後書き）

名前を入れず「いやるのは本氣で無謀だったなあと反省しているや。

誰かの声が聞こえた。遠くでゆらゆらと揺れる声。

その声は私の頭上を通りすぎていって、現時と夢の曖昧な境界線に消えた。

ふわふわと、微睡んでいるのが何となく解った。眠たくないと思つていたけど、やっぱり寝てしまつたらしい。薬のせいなのか、疲れているせいなのか。

でも、正直起き上がる気なんか、欠片もなかつた。何故なら微睡んでいるのが大好きだからだ（私がこの世で一番好きな瞬間は、あつたかい布団の中でぬくぬく微睡んでいる時なのだ）。

そんな曖昧な世界の中で曖昧さを噛み締めながら、ふと、気が付いた。

昨日あいつに好きって云われて、私否定的な事しか、云つてないんじやないか、な？

あ、ヤバイ。

一気に覚醒した。がばっと跳ね起きてから頭を抱えた。

そうだよ、うわどうじょう。え、ナーニー、私もしかして振つたことになつちゃつてたりしちやつたりして？！え、この場合どうすれば？と1人であわあわしていると、小さく吹き出す音が聞こえた。

「……くつ。お前、何1人百面相してんだよ……！ あーおもしれ

「え、や、や、ひょっと待って！ なんで居るのー、わ、私思いつき
パジャマ……！」

「あ？ おばさんが入って待つとけって。 倭つて信用在るから？」

「な、なんつー腹の立つ……！」

なんでこのタイミングでこんな事になるんだろうか。 ベットの傍までイスを持ってきていたらしい変態は、私の真横で足を組んで座っていた。

頭は寝癖だらけだし、顔も思いつきり寝起きだし、パジャマだし、寝起きだからちょいとはだけてるし。

ちよつとお母さん何してくれてるの貴方！ とキレたくなつてきた。 私はブツブツと恨み言を呟きながら、掛け布団を頭まですっぽり被つて体育座りをした。 そしてまだ笑い続ける変態に背を向ける。 これを引き籠もりスタイルと名付けようと思つ。 そしてまだまだ私の背後で笑つてゐる変態に、我慢出来ずと思つきり叫んだ。

「あ、ーもう、早く出て行つてよー！ ひつひは病人なの。 女の子なのー！」

「今日出たプリントを持つてきつてやつてるハリーのに、なんつー暴

言

「私が暴言ならそつちがやつてるのは暴挙つてはつんだよー、ばつかじやないの、早くでつてば……！」

「嫌だ。 僕はまだ昨日の答えを聞いてない」

ベッドのスプリングが悲鳴を上げた。 私の背中には、確かな重み。

一瞬で塗り変わる、曖昧な世界。

でも、この曖昧さが壊れてきてることぐらいこ、あたりと添付いて

る。

私が必死で守つて手放さなかつた世界にヒビを入れたのは、彼。

「云えよ」

「…………」

「気になつて勉強どころじゃない。今日だつて何食つたかすら覚えてない」

「…………」

「云えよ。じゃないと、今すぐ……食つぞ」

「え？ お弁当を？」

ワントーン下がつた声音にそんなにお腹が空いていたのかと申し訳ない気分になる。私が昨日曖昧に終わらせたせいでおばさんのお弁当が食べられなかつたなんて申し訳なさすぎる。

私がそう云つたにも関わらず彼はピクリとも動いていないうこ感じられる。可笑しいな。お腹空いてたんじゃないのかな。

後ろを向いて確認しようとした私の頭にベシリと何処となく力なさ氣に手刀が下ろされた。

「こつたい！ なんでそこで呑くワケ！ 別にお弁当食べたつて良いし！ 育ち盛つじやん？」

「あ、まあ、本つ当じ、ぱつか・・・！」

私にすゐずるともたれかかつて、思いつきり溜息を吐いた奴は「云えよ」ともつ一度、何故か力無く繰り返してきた。

曖昧な世界。ヒビを入れたのは彼だけど、きっと、壊すのは、これが創つた彼じゃない。

彼の創つたこの世界を、頑なに、怯えながら、手放さなかつた、

「…………レイカさんには、嫉妬した」

私にしか、きっと、壊せないとthought。

やつと終わりが見えてきました？（何故疑問系）

次の次でラスト、です。取り敢えず頑張って完結させてみます。

ヒビの入った曖昧な世界。それを壊すのは、きっと私。

「嫉妬、した。ううん。違う、あの時私はレイカさんを見下した。見下して、哀れんで、それでその上、嫉妬した。……自分が、汚いって、思った。浅ましくて、薄汚くって、最低だと思った。だから逃げて、でもって、なんか泣きたくなつた」

「…………」

パタタ。と音がしてお気に入りの優しいオレンジ色をしたシーツの上に昨日の海の一部が出現した。私のそれほど長くない睫毛の先から流れ落ちていくそれは、一粒一粒で止んでしまつた。

きっと昨日私の海は無くなつてしまつたのだ。きっと後ろにいる彼が全部飲みこんでしまつたせいだ。

私は染みの付いた乱れているリネンを見ながら、両膝の間に頭を沈め、自分の中にある何かを吐き出した。彼がずっと無言だった事が、少し怖かつたけれど、その事に何処か安心して曲がついていた背中を少し戻してほんのちょっと後ろに体重をかけてみた。

感じるのは確かな感触。

ああ、彼は今後ろにいて、私の話を聞いてくれてるんだ。と、その事に何故だか胸がキュンとした。

「私、自分がどうしたかったのか良く解らない。この曖昧な感じをずっと守りたかったのか、それとも壊したかったのか。変わりたいのか、変わりたくないのか。もう分かんない」

「お前は、結局どうなんだよ。俺の事が好きなのか唯の幼馴染

みなのか。それをはつきりせめてみるよ」

問われて、私は何故だか少し躊躇する。これで本当に、きっとこの曖昧な世界は壊れてしまうだろう。欠片さえ残さず、記憶の中に、その曖昧さの居心地の良さだけを遺して。

曖昧な、私達の世界。この世界の中では、2人だけの時は、彼は私のモノだと思えたんだ。

きっと今から始まる世界は曖昧なんかじゃなくってしつかりと支えられていて、きっともつと幸せで、本当に彼を自分のモノだつて、胸を張つて云えるようになれるはず。

だからこの世界は、私が壊す。今から云つ、たつた一言で。

「……………わ、たし、は……うん……」

さよなら、曖昧な私達の世界。

「好きだよ」

ぎゅっと、抱きしめられる。強くて、痛いと思った。でも離して欲しいとも、思わなかつた。

彼との曖昧な全て。

机の上の大量のチョコレートも、オレンジジュースも、ハンバーガー・セットも、似合わないコンビニの制服も、手袋も、アイスティーも、チーズバーガーも、テリヤキバーガーも、レモンティーも、マフラーも、海も、全部全部、愛おしくて。

でもきっと、曖昧じゃなくても、これからの中全でが、これまでの物も、全てが、愛おしい。そう思つ。彼となら、そう思える。

めまいがひどい、

めまいがひどい、

魅昧な「田田」（前書き）

終了。です。最後まで、お詫びを田田が口に言わせつづいた。一度とい
んな暴挙はしません。

結局、曖昧な日々と恋人の日々は、あんまり変わっていない気がする。

「付き合って速攻で、デートつてするもんなの？」

「さあ?
別に何時したって良いだろ。
朝帰りした仲だし?」

親父臭く云ひな変態

あの後コイツが何か云おうとした時、ちょうど良いタイミングでドアをコンコンとノックされた。

私は思わず呟んで背後はいた二イツをへり上から呟き落としてしまった。

真っ赤になつた私を見てにまにましたお母さん】、何かあつたのかと聞かれて、私は思わず部屋から逃げてしまい、少ししてからもう一度恐る恐る部屋に戻ると、ぐつたりしたあいつと、更ににまにましたお母さんに出くわして、私もぐつたりさせられた。

夕飯を置いて「じゃあ帰つ」とわざといらしゃったお母さんが出で行つた後に、日曜日にデートに行つたとおつり話をした後、アイツはさつさと帰つていつた。家でおばさんからまた根掘り葉掘り聞かれるんだろうなと思うと、同情を禁じ得なかつた。

絶対に、お母さんは出て行つた後おばさんの所に行つて「うちの娘をお願いします」トークをしたに違いない。アーメンと胸で十字を切つた後、あつちゃんに電話をして昨日心配してくれてありがとつと云つた。いや、

「まあ、そんなことよろしいのですよ。
女は私の親友に部類する方ですもの！」
さながら私は貴方達2人に
私達は友人。その上貴

恋の矢を射るギリシア神話のエロス様だつたと云う事ですわね！感謝の辞を示されるよりも、私は事の顛末を知りたいのです！ ああ神様っ。 此處にまします私の愛すべき親友の未来に愛おおからん事を！！

「え、と、あつちゃん？ 聞いてる？ おーい」

「はつ！ すっかり我らが愛の神に心を奪われておりました。 さあさー、遠慮する事など御座いません。 ずっと話して『じらんなさい！』

あまりのテンションの高さに更にぐつたりしつつも、土曜日は一日療養して、そして日曜日。

私達は、特に何をするでもなく、ショッピングモールを唯ぶらぶらと歩いていた。 特に何か欲しい物がある訳でも、何処かへ行きたい訳でもない。 だから取り敢えず、出来たばかりのショッピングモールに行つてみようと云う話になつたのだった。

私はちらりと自分の右手に視線を落とす。

其處には私のと、私の物じゃないゴツゴツした大きな手が繋がつていて、少し、鼓動が跳ねた。

周りには手を繋いでいるから、少しはカップルっぽく見えるだろうと思うが、どうだろうか。

なんせ私と彼は確実に釣り合つていないので。 先日の喫茶店でそれを切実に感じた。 相手が悪かつたのもあつたかも知れないけれども、それにしても周りの反応には多少なりとも傷ついた。

だから思うのだ。 カップルっぽく見えるようにするにはどうしたら良いのだろうか、と。 勿論私が釣り合つようファッショングラ化粧やらは努力するようにしなければならない（今日はちゃんとビューラーも使えた）のは分かっている。 が、今すぐは無理だ。

即効性がなければいけない。

手を繋ぐ。

確かに一番手軽だし今すぐできて有効的だ。 だけど別にそれだけで彼氏と彼女に見える訳ではない、気がする。

「うーん、どうしたら周りにいるカップルの様に、カップルっぽく見えるんだろうか。 ……難しいもんだな。 首を傾げてふむむと唸ると、斜め上方から呆れた様な溜息が降ってきた。

「……お前、本当に変な所で器用だよな。 良く歩きながら首を傾げられる……。 で、どうしたんだよ」

「いや……。 私達って、恋人っぽく見えるかなあ？ と思つて」「はあ？ なんだそれ」

「恋人っぽい恋人つて、どんなだろう。 と思つて。 うーん、どんなだと思う？」

「ああ、それはあれだな」

何かを納得した様に肯いている彼は、此方を向いてニヤリと笑つた。

何故だか私はその時、狼に補食される羊の心境をとでもよく理解出来た。

ぐいぐいと引っ張られたのは、階段前のちょっとした死角。

でも彼は今さつきから女性客の視線を集めているから、今更隠れる必要なんてない。 と云うよりも全く意味がない。

意味の分からぬ行動に眉根を寄せると、顎をぐつと捕まれて上を向かされた。

それからすぐ唇に、生暖かい感触。

「キスしてたら、どうからどう見ても恋人だろ？」

結論、曖昧な日々と恋人の日々は、違うらしい、です。

ハッピーホンダでハイナーレ！

最初の4話ぐらいまでは書いたのが約半年前で主人公の性格が何処かに飛んでしまっていたので、最終的になんとも云えない別人感に満ちていてすいません

誤字脱字など作者の国語力の低さが半端ないので教えいただければ…！と思います。ほんと願いします。

改稿作業（2010/7/3）中にあまりにも「メントください恨みますよ的な自分の後書き前書きに

なに書いてんだ

と恥ずかしすぎて死にそうでした。本当にすみません。

いやはや、おまえはどんだけ寂しがつてんだと。気持ち悪い事いっぱい書いててめげまくりですみません。

そして感想を下さった皆様、ほんとうにありがとうございます！正直感動で泣きやうでした。今も若干潤みます

最後になりましたが此処までお付き合って下り読み破していくだれつた皆様、本当に有難う御座いました。

＜ア>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4339f/>

彼と彼女の曖昧ミーマイン

2010年10月23日14時32分発行